

ミュージアムパーク茨城県自然博物館
令和5年度第1回博物館協議会の開催結果概要

1 博物館協議会の概要

当館の博物館協議会は、博物館法第23条の規定に基づく法定組織であり、茨城県博物館協議会条例により設置されている。

委員の任期は2年、委員数は13名で、うち1名は一般公募により選出されている。
会議は、委員長によって招集され、通常年2回開催している。

【参考】博物館法

第23条 公立博物館に、博物館協議会を置くことができる。

2 博物館協議会は、博物館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関とする。

2 日時

令和5年11月30日（木）14時00分～15時40分

3 場所

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 セミナーハウスA

4 出席者

樋口正信委員（委員長）、生田目美紀委員（副委員長）、石田奈緒子委員、
柏 孝子委員、高尾戸美委員、藤咲富士子委員、吉富友恭委員、鷺田美加委員

※事務局出席者

横山一己館長、湯浅友明副館長、江原章子管理課長、岸川将史企画課長、
国府田誠一教育課長、吉川広輔首席学芸主事（池澤資料課長 代理）、
小池涉首席学芸員、井土ひろみ係長、栗栖宣博主査、田宮奈津美主任、
仁平可那子主事

【文化課】

羽石真純主任

5 議事概要

(1) 館長挨拶：

- ・ 本日までのご出席に感謝申し上げます。
- ・ 当館の野外、館内などで故障が発生している。野外のとんぼの池の橋は通行止め、恐竜動刻も故障して今日は動いていない。来年 30 周年を迎えるが、老朽化などの問題が多くなってきている。
- ・ 昨年度から、各所属でネーミングライツの導入や寄付の受け入れを推進することが、県全体の取組として行われている。当館でも、今年度から来年度初めにかけて進めていこうと考えている。いただいた寄付金は、青少年の学習活動のためになるようなところに使っていきたいと考えている。
- ・ 博物館協議会は博物館運営にとって重要な組織である。この会議では委員の皆様から様々なご意見をいただき、今後の運営に活かしていきたい。今後ともご協力を賜りたい。

(2) 会議の成立について

本日の協議会は委員 13 名中 8 名の参加があり、会議は有効に成立する。

(3) 議案説明（事務局）

○議題

- ① 令和 5 年度前期事業の報告について
- ② 令和 5 年度後期事業計画について
- ③ 予算・決算などについて
- ④ その他

(4) 質疑・意見交換

○A 委員

- ・ R4 年度第 2 回協議会で議題に上がっていた調査研究体制の見直しについてはどうなっているか。

○事務局

- ・ 現在、調整中。今年度中には計画を完成させる予定で進めている。

○B 委員

- ・ 企画展のネーミングが大変素晴らしい。特に「うんち」展は、潔く思い切ったネーミングだった。普段、博物館に来ない層も興味を持っていたと感じる。
- ・ 子供たちは「うんち」という言葉が大好きで、絵本でも登場回数が多い。小さな子も楽しめ、学びが深まる企画展だった。
- ・ 地衣類は、あまりなじみのない言葉ではあるが、ポスター紙面で大きく「地衣類」の文字にスペースを割いていて良い。ポスターの効果は高いと感じる。

- ・ 教育普及事業のリノベーションについて、「講師派遣事業と博学連携事業との統合」をもう少し説明してほしい。

○事務局

- ・ 学校からの要望に応じ、職員を派遣して講義を行っているのが講師派遣事業。
- ・ 博学連携事業も学校からの要望に応じて実施という部分は同じだが、予め教科書の内容に準じて教員側で指導案を作成し、4～5回の連続したプログラムとして実施するもので、館とのより深い連携構築、学習効果が期待できる。ただ、その準備等には相応の時間が必要であり、多忙な教員にとってハードルが高いのが実情。最近では、利用が近隣学校のみに残っている。
- ・ このため、両事業を統合しつつ、もっと学校現場にとって利用しやすく、かつ実りの多い制度にしていきたいと考えている。

○OC委員

- ・ この場所（博物館野外）を環境省の自然共生サイトとしてOECMに登録して、アピール・活用していくこともできるのではないかな。

○事務局

- ・ 当館野外施設の規模では、エリアとして狭いのではと考えている。

○OC委員

- ・ もっと狭いところも登録されており、問題ないと思う。国立・国定公園以外の緑地が次々と登録されている。館の野外施設の自然は大変素晴らしく、申請要件に合致する。登録料は無料。広報効果が期待できるので、検討してほしい。

○事務局

- ・ 菅生沼や、あすなろの里まで含めて包括的に登録するという方法も考えていく。

○OD委員

- ・ 上半期の入館者数であるが、コロナが5類へ移行したのもう少し増えるのかと予測していた。近隣のお客様のレジャーの選択肢が遠方にも広がっているように思う。より魅力を感じてもらえる施設を目指してほしい。
- ・ 子供がピンク色のバッタが見つかったとの新聞記事があった。これからも小さなことにも丁寧に対応してくれる博物館でいてほしい。

○事務局

- ・ 上半期の入館者数は昨年度より若干増加しており、混雑度合いなどを考えるとちょうど良いくらいの数字だと思う。
- ・ 昨年度はまだコロナの影響が少し残っていた中でも意外に多くの来館があったのは、当館が近場かつ安全な施設として認識されていたことが一つの大きな要因だったのではないかと推測している。委員ご指摘のとおり、今年度、5類移行後も入館者数が大きく増えていないのは、遠方に出かける方が増えたことが一因と考えられる。

○E 委員

- ・ 来館団体の中で、特に特別支援学校関係がかなり増えているようであるが、何か特別な対応を行ったのか。

○事務局

- ・ 特別支援学校が増えていることに対して、新たに特別なことを行ったわけではない。コロナが落ち着いてきたことにより、特別支援学校が校外に活動を広げているものと感じている。

○E 委員

- ・ 企画展アンケートの回収方法が紙から電子媒体へ変更になっているが、その理由と影響は？

○事務局

- ・ 集計が容易であること、また、来館者も気軽に回答していただけるのではと考えて電子に切り替えた。変更後、回答者数が大幅に増えているが、デメリットとしては、子供の意見がどこまで反映されているかが未知数というところである。

○E 委員

- ・ 展示事業について、ポケット学芸員でタブレット貸出希望者の属性は？また、多く閲覧されているコンテンツの分析等から、サービス向上に繋げている取り組みがあれば教えてほしい。

○事務局

- ・ タブレット貸出相手のデータは取っていない。コンテンツの利用状況も特にデータは取っておらず、実際には来館者の様子を見ながら、コンテンツの充実や多言語化対応の必要性の有無等、対応を考えているところである。

○E 委員

- ・ 学校へ提供しているプログラム等について、県内と県外の利用者の区別化・差別化は図っているか。

○事務局

- ・ 提供しているプログラムについては、県内・県外で区別していない。現状では、県内より県外の学校からの利用が多い状況にある。
- ・ 講師派遣、移動博物館、教育用資料貸出などについては、原則として県内のみとしている。

○F 委員

- ・ 県外学校、福祉施設、保育園・幼稚園、高齢の方など、さまざまな人が利用する施設になっていて、みんなのニーズに合った魅力ある施設となっている。
- ・ 30周年を迎えるにあたって、博物館のメンテナンスは大変かと思う。
- ・ 地域の高齢者などに対する移動博物館などがあれば、非常にありがたい。知的な好奇心を満たすことは健康寿命を延ばすことにつながる。

OG 委員

- ・ 子育て世帯が流山おおたかの森などTX沿線に増えているので、秋葉原駅やTX車内でのモニターに博物館の紹介動画を流すのも効果があると思う。中吊り広告も、引き続き協力したい。

○事務局

- ・ TXは利用者が多く、その車内の中吊り広告は広報効果が大きいと考えており、大変ありがたく感じている。
- ・ 2月には、秋葉原駅TXプラザでのミニ移動博物館の話もいただいており、非常にありがたく思っている。

OG 委員

- ・ ミニ移動博の実施について、職員の負担増にならないかということは懸念しているが、この機会をぜひ活用して、都内での広報の足がかりとして欲しい。
- ・ バスの運転手不足が問題となっている。館へのバスは減便になっていないか。

○事務局

- ・ 現在のところ、バスの減便の話はない。

OG 委員

- ・ 30周年に向けて、周年記念事業の実施予定は。また、博物館が向かう方向性などについても発信した方がいいと思う。

○事務局

- ・ 記念のセレモニー等については職員と経費の負担が大きい。新たな客層の掘り起こしにつながるような、特別な企画展を計画している。

OH 委員

- ・ 地衣類展オープニングに参加して、身のまわりの地衣類や日本画などに注目するようになった。人生が豊かになったと感じる。素敵な企画展に感謝している。
- ・ p21 教育プログラム「一人一台端末に対応した教育普及プログラムの開発」とは。

○事務局

- ・ 学校現場ではタブレット端末を利用した学習が浸透している。館内でもタブレットを片手に、デジタルで問いに答えたりできる学習ツールを考えている。展示更新に比較的容易に対応（データの入替）出来る点もメリットと考えている。
- ・ 課題としては、導入時の予算がかかること。また、学校によってタブレットの校外への持ち出し基準が異なることも課題と考えている。

OH 委員

- ・ ロイノートなど、外部システムの利用を考えてはどうか。システム開発のコストが節約できる。その他にも、展示品脇のコードなどにタブレットをかざすと、3D、360°で展示品を詳細に見ることができたり、クイズ、スタンプラリーの機能も組み込まれているシステムもある。月数万円程度で契約可能なので、予算的

に可能であれば検討してみるのも面白いと思う。

- ・ 歳出における管理運営費の割合が徐々に増えているが、これは施設の老朽化等による修繕費が増えていることが要因なのか？

○事務局

- ・ 管理運営費の増加の要因は、主に委託業務の person 費と光熱水費の上昇によるもの。

○OH 委員

- ・ 館のリニューアルを考える必要がある。日本科学未来館のリニューアルでは様々なコンテンツが導入されている。リニューアルに向けたアイデアの構築が必要と思う。
- ・ リニューアルに向けて、クラウドファンディングなどの方策も視野に入れたらどうか。

○事務局

- ・ 博物館はとんぼの池の修繕などを含めて、リニューアルに関する経費はとても高額になるため、当面は予算措置される見込みはない。限られた予算の中、工夫して運営している状況。
- ・ 博物館では寄付部門を立ち上げるが、事務手続きなどの職員の業務負担が膨大にならないように考えている。

○OA 委員

- ・ 予算がない中、頑張っているとのことであるが、スタッフの資質向上が重要であると思う。館 HP からスタッフ紹介のページを見ると、学芸員は 6 名、それ以外の 14 名は教育委員会から来ている。このことの強みは新たな風を吹き込めること。弱みは、学芸員以外は 5～6 年で館を離れてしまうため、経験の積み重ね・ノウハウの継続が難しいこと。
- ・ 交流職員の中に、学芸員資格を持っている職員はいるのか。

○事務局

- ・ 資格保持者はいるが、採用に当たり、学芸員資格の有無は考慮していない。

(5) 第 2 回博物館協議会の開催について

令和 6 年 3 月上旬を予定。

以上